溶けない飴に、あこがれて。

なつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
溶けない飴に、あこがれて。

【Ｎコード】
Ｎ１４９５Ｔ

【作者名】
なつき

【あらすじ】
飴を舐めていると、自分が女であることを思い出す。

飴を舐めていると、自分が女であることを思い出す。
飴はばかばかしいくらいに甘ったるくて、口に入れれば純粋で強烈な快感をくれる。あたしはいつも、飴が溶け始める瞬間に、小さく眉をひそめてしまう。
だってそれは、あまりにも気もちの良い体験だから。
あたしはきっと、この飴と同じくらいにだらしがない。そのことを、舌にねっとりと絡みつく甘さによって知ってしまうのだ。そしてそれは、あたしに性の快楽を連想させる。危険な欲望。
飴と性の快楽は、似ている。あきらかに。だからあたしは飴を舐めるたびに、自身の性を意識せざるを得ない。
舐める、その行為は、おかしくなるほど気が狂うほど、せつなくなるほど気もちが良い。

休み時間、教室の喧騒に囲まれて飴を舐めていると、隣の席で本を読んでいたジュンノが、飴舐めてる、と聞いてきた。本から顔をあげず、男の子のわりに長い前髪を払いもしないで。じつはこれを待っていたあたしは、しかし何てことない顔で、うん、と頷く。いつも通りのやり取り。
ジュンノが、あたしを見つめる。ちらちら光る前髪のさらに奥、細い銀色フレームの眼鏡の奥には、しずかに曇った瞳がある。まつ毛は繊細で、柔らかそう。肌はきめ細やかで透き通っていて、つるりとした上品な食器のようだ。それだけで思わずため息をつきそうになるのに気がついて、慌てて抑える。
「くれない」
ジュンノは、無表情に無感情に言う。とても人に、なにかを頼む言いかたではない。でも私はブレザーの胸ポケットに手を突っ込み、飴の袋を取り出す。ゆっくりとゆったりと、余裕があるふうに見え

るように意識して。ほんとは息苦しいほどに緊張しているけれど、ジュンノの前で醜態を晒すわけにはいかない。

今日渡すのは、メロン味のフルーティな飴。メロン味は、爽やかなふりしてじつは粘っこく後をひく。香りが、残るのだ。いつまでも。

何も言わずに、飴を渡す。そのとき一瞬、ほんの一瞬だけれど、私の指先とジュンノの手のひらが触れあう。生々しい温もり、これは体温。私はもうどぎまぎとして、息苦しくなってしまう。

「ありがと」

ジュンノは言って、飴の袋を開ける。細くて白くて華奢な指、それなのにその手つきは乱暴でどこか暴力的。あたしはそれを、凝視してしまう。飴がじんわりと溶けゆき、だ液と混ざってねっとりする。

ジュンノは、鈍く輝く飴玉をじっと見つめる。なにかの真理を見出すかのように。ため息をつくように口をわずかに開け、躊躇したあと遂に飴玉を放り込む。そして小さく唇を噛んだあと、本にまた、視線を戻す。

あたしは思わず、つばを飲み込む。この甘さを、この快楽を、ジュンノも感じているはずなのだ。だってあたしも、メロン味の飴を舐めている。ジュンノに渡す飴は、いつだってあたしと同じ味。

あたしはこうして、ジュンノに快楽を与える。毎日毎日繰り返し、ジュンノを気もち良くしている。

うずうずした。口のなかの快感と身体の奥底からの快感とがいっぺんに氾濫して、あたしをしあわせな気もちにさせる。気がおかしくなりそうな、しあわせ。時計を見る。十時十分、今にもひとりベッドに入って、このしあわせを存分に味わいたいと思った。

ジュンノは隣で、本を読んでいる。でもあたしにはわかる、ジュンノがそのじつ甘い快楽をたのしんでいること。あたしと同じ、快楽を。あたしたちは、ひそやかな共犯関係。

飴を、舌で弄ぶ。そして思う。こんなふうにジュンノを舐めるこ

とができたら、どんなにかしあわせだろう。

飴のなにがかなしいって、溶けてしまうところがかなしい。結局は、とろりと儚く消えてしまう。あたしを残して消えてしまう。そんなときあたしは、裏切られたような気分になる。空っぽの口のなか。

だってずっと舐めていたい、ずっとずっと味わっていたい、どこまでも味わい尽くしたい。そう思って舌を動かせば動かすほど、飴はどんどん小さく縮こまってゆく。

足りない、ぜんぜん足りない、あたしはもっと欲しいんだ。もっともっと、あたしを気もち良くさせて。果てしなくたって良い。果てしないほうが良い。永遠に永久に、快楽を貪りたい。なのに飴は、何でどうして溶けてしまう。なくなってしまう。ふっと飴が消えるその瞬間、あたしはいつもしんと白ける。

だからあたしは、溶けない飴が欲しい。どれだけ舐めてもしゃぶっても、ぜったい溶けない飴が欲しい。

そしてあたしは、思う。

ジュンノ。

飴とあの男の子は、切り離すことができない。あたしは飴を欲するように、ジュンノを欲している。

ジュンノという飴が、欲しい。つよくつよく、欲しい。舌を隅々まで這いまわらせて、どこまでも果てなく味わい尽くしたい。

ジュンノは溶けない飴。いつかそっと口をつけるその瞬間に、あたしはどうしようもなく焦がれている。

快感の余韻が倦怠に変わってゆくのを感じながら、部屋がいつの間にか薄闇に満たされていることに気がついた。帰ってきたときはまだ、ちらちらと光る埃が見えるくらいに明るかったのに。そしてそうだ、その明るさが邪魔で、カーテンをぴしゃりと閉めたんだ。鍵をかけて電気を消して、ブレザーセーターブラウスと、何層もあ

る制服をもどかしく思いながら脱ぎ捨てて、下着を外して、全部放り出した。だから今カーペットの上には、それらがふにゃりと散乱している。きっちりと着こなされるものであるべきそれらは、今はこんなにもだらしがない。

歯に力を入れると、かりっと硬い音がして飴は砕けた。甘みが弾け、さっと消える。深く深く胸の奥から息を吐いて、あたしはベッドのうえに起きあがる。身体の中心、いちばん奥が、とろりとろりと溶けている。ねっとりと濡れている。気もちも身体も、だるい。髪に手をやり、もう一度息を吐く。呼吸はいまだ、荒い。心臓が、とくんとくんと激しく動く。

髪をいじりながら、思う。けっこうあたし、かなり変態、かもしれない。飴を舐めながらひとりでする中学生女子なんて、ふつういないだろう。でもここで、あたしはふっとほくそ笑んでしまうのだ。自分の変態性がおかしくて、心地良くて。でもだって、欲しいんだもん。したいんだもん。自分で自分を気もち良くするのがいけないとか、恥ずかしいとか、あたしはぜんぜん思わない。だって気もち良いんだもん、しょうがないよね。あたしはくすくす笑う。

闇はどんどんと濃くなってゆく。窓の側の街灯が、カーテン越しにぼんやりと光っている。そろそろさすがに始末を始めようと、あたしはとりあえず電気の紐に手を伸ばした。ぴゃん、と間抜けな音がして、部屋は健全な色あいを取り戻す。

ティッシュボックスは、すぐ目の前にある勉強机の上に置いてある。手を伸ばしてティッシュを取った、と、そのとき携帯電話がちかちか光っているのに気がついた。それも一緒に手に取る。ティッシュの紙を何枚か引っ張り出しながら、あたしは携帯を開いた。メールだ。クラスのわりと親しい友人、栗子からだった。何だろうと思いながら、あたしは携帯を開いた。

そして、固まった。

『純野くん彼女いるってよ』

ジュンノ。

食い入るように、画面を見つめる。何かの間違いじゃないか、と思う。でも硬質な活字は確かに、ジュンノについて語っている。純野くん彼氏いるって。

髪を梳き、小さく息を吐く。頭をがりがりと掻く。顔をぎゅっとしかめて、足を激しく揺らす。そしてまた髪を梳き、小さく息を吐く。唇を強く噛み、宙を睨む。

裏切りだ。これは、あたしに対する裏切り。決定的な、裏切り。だっていつでもあたしたちは共有してた、おんなじ快楽を共有してた。それなのに、彼女？

先ほどまでの火照った幸福はどこへやら、あたしは徹底的に醒めてしまっていた。自身が何も身につけてないのが急にばかばかしく思えて、あたしは床に落ちている服を掴み乱暴に着た。そしてその勢いで、携帯のキーを打つ。

『誰？』

栗子からの返事は、すぐに来た。

『二組の美月ちゃん。知ってる？』

みづきちゃん。知らない名前だった。

『知らない』

『図書委員長で、色白で、髪がカールしてる。ていうか明日教えるよ』

あたしは携帯を、ベッドの上に放り投げた。そして膝を抱え、ジュンノと「みづきちゃん」のことを想って悶々とした。飴は一回口に入れたものの、うざったくなって吐き出してしまった。

空っぽの口のなかで、小さく呟いてみる。みづきちゃん。まがまがしく不穏な響きだ。気もちの悪い余韻のなか思い出す、あたしは、ひとりだ。

翌日の朝、栗子は登校するなりあたしの席のそばに来て、神妙な顔で座った。おはよう、と彼女は言う。おはよう。飴を舐めながら、あたしも返す。そして一瞬の沈黙ののち、あたしは切り出す。

「ジュンノが、つきあってるって……」
「うん、そうだと思う。昨日部活の帰りに、友達と帰ったんだけど、純野と美月ちゃんが一緒にいるとこ見てさ、ふたりで帰ってんの。そしたら友達があたし知ってるあのふたりつきあってんだよ！　って言い出してさ。マジ？　って聞いたら、ほんとにそうだって言うの。その友達っていうのが二組の子で、美月ちゃんともわりと話すみたいだし、わりかし信用できる情報だと思うんだよね。それにじっさいあのふたり、何て言うかな、仲良さそうだったし、」
　栗子はいきなり言葉を切り、あっ、と小さく叫んでドアのほうを指さした。見ると、そこには女の子がいた。彼女はドアの前に立って、きょろきょろとあたりを見回していた。あたしは小声で素早く聞く。
「あの子？」
　うん、と栗子はうなずく。あたしと同じく、彼女をうかがうように眺めながら。
　可愛い、子だった。ふわふわと長く茶色い髪、ぺっとりと白い肌、にこにこと細められた瞳。感じの良さそうな、笑顔の似あう子。あたしはそれが、たまらなく嫌だった。むかつく。苛つく。彼女が微笑むたびに、どす黒い染みが広がってゆく。
　彼女に声をかけられた子が、教室に向かって言う。
「純野くんっているー？」
　知らなーい、と誰かが言い、まだ来てないんじゃない、と誰かが言い、彼女は、ありがとう、と言ってぎゅっと微笑み、ぱたぱたと去っていった。あっという間のことだった。膝下丈のスカートが、ひらりときれいに翻っていた。
　飴を、歯で砕く。彼女のくちゃっとした笑顔が焼きついて離れなくて、あたしはそれを、握りつぶしたくなった。ああ、あたしって、嫌な子。
「ありがとう、栗子」
　言ったあたしの顔はそうとうに蒼白だったのだろう、大丈夫？

と栗子は心配してくれたが、あたしは返事をせず、じいっと考え込んでしまった。

開いたノートは真っ白で、シャープペンシルはころりと転がっているだけ。教師の声を聞き流し、頬杖をついて考える。隣に座っているジュンノのことを、いつもにまして強く意識しながら。

あたしはきっと、満ち足りていた。この毎日に、満足していた。ジュンノを眺めて甘い快楽を共有して、妄想のなかで彼を舐めてさえいれば、それでしあわせだったのだ。

なのに、そのしあわせな世界は傷つけられ損なわれた。彼女の、みづきちゃんの手によって。そう思うと、あたしはみづきちゃんがゆるせなかった。

だってつきあうって、つきあうってことは、ジュンノがあの薄い唇で、好きだって言ったり、柔らかく笑ったり、もしかしたらキスとか、そういうことだって、しちゃうってことでしょう？　キスってことは、ジュンノを、他の女の子が、みづきちゃんが、舐めるかもしれないってことでしょう。絶望的だ。そんなの、果てしなく、絶望的。想像するだけで、あたしは真っ暗になってしまう。

気づかれないように、ジュンノをちらと見る。ジュンノは背すじを伸ばして黒板を見据えたまま、ルーズリーフにさらさらと文字を書き綴っている。相変わらず端正で、状況を一瞬だけ忘れてうっとりしてしまう。しかし次の瞬間には現実を思い出し、あたしはまた、そわそわと絶望し始める。

あたしとジュンノは、共犯関係だったはずなのに。飴という痛烈な快楽を共有する、共犯関係だったはずなのに。あたしはてっきり、ジュンノもわかっているものだと思っていた。すべてをわかっているものだと。だってそうじゃなきゃ、あたしに毎日飴を要求してくるはずがない。それなのに、ジュンノは彼女なんかつくってしまった。ほんとはわかってなかったの？　ただ飴を、単純に、ほんとに単純に無邪気な気もちで舐めているだけだったの？　盛りあがって

たのは、もしかしてあたしだけだったの？
泣きたかった。今すぐしくしくと泣き始めて、ジュンノを何回も何回もぶちたい気分。でもそんなこと、じっさいにできるわけがなかった。だってあたしは、ジュンノとろくに喋ることさえできないのだ。じんわりと、気もちが瞳にせりあがる。あたしは両手で、顔を覆う。
どうしたら良いのか、わからない。飴さえも、きっと今はあたしを救ってくれない。

あたしは飴を舐めるのを止めた。舐めようと、思えなかった。飴はあたしにとって、性の快楽そのものなのだ。こんなに沈んでいるときに、そんなの貪る気になんてなれない。
無味乾燥な毎日だった。甘みのない生活というのが、こんなにも味気ないものだということを知った。
いつでもどこでも飴を舐めていたあたしは、そういうわけで学校でも飴を舐めるのを止めた。したがって、ジュンノがあたしに話しかけてくることもなくなった。思えばジュンノはいつだって、飴舐めてる、と話しかけてきたのだった。飴以外の話を、あたしたちはしたことがない。
ジュンノなんか、もう気もち良くしてあげない。あたしはかたくなに、そう決心していた。だってジュンノは裏切り者。可愛い可愛いみづきちゃんと、無味乾燥なしあわせを暮らせば良いじゃない。
でも、なのに、ジュンノは話しかけてきたのだ。

「最近、飴舐めてないよね」
高めなのに、大人びて冷静な声。その声が、再び自分に向けられるだなんて思いもしなかった。あたしはうつむいたまま動きを止める。硬質な木の机。吸う息が、いちいち胸の奥に突き刺さる。机の下に隠した手が、震える。
うん、と答える自分の声が、ずいぶんと落ちついてびっくりした。

うん。舐めてないよ。
「なんで？」
「なんでって、」
あなたのせいだよ、とはさすがに言えなかった。言葉に詰まる。
「飴、止めちゃったの？」
「……、うん」
「そっか。おれ、けっこうたのしみにしてたんだ。神崎に飴もらうの」
ジュンノは言って、あたしは思わず勢い良くジュンノの顔を見てしまった。埃ひとつない眼鏡の奥、ジュンノの瞳は、つややかに潤んだ瞳は、確かにあたしを捉えていた。
「なんで」
反射的に、聞いていた。
「飴、好きなんだ。けっこう」
あたしはそれを聞いたとたん、泣きそうになって唇を噛んだ。ジュンノは飴を、あたしを必要としていたんだ。救われている自分が、単純すぎて情けなかった。でもしょうがない。だってジュンノは言ったのだ、飴、好きなんだ、けっこう。
「あのさ、」
あたしの声は、上ずっていた。
「あの、気もち良かった？　その、飴舐めてるとき……」
「気もちが良いか？　……おいしかったよ。すごく。神崎のセンスって、良いから」
それを聞いて、あたしは果てしないよろこびを感じた。そっか、気もち良かったんだ。あたしはジュンノを、気もち良くしていたんだ。あたしの飴で、ジュンノは気もち良くなっていたんだ。
でも次にジュンノが言った言葉は、ずいぶん久々に幸福だったあたしをうちのめした。
「まあだから、残念だけど、でもしょうがないよね。今までありがと」

待って。そう言いたかったのに、もちろん言えるわけなくて、次の瞬間には、ジュンノは本の世界に戻っていってしまっていた。
あたしは頬を、両手で押さえた。火照っている。心臓はいまだ、どくんどくんと強く鳴っている。ぐちゃぐちゃしている、混乱している。しあわせと絶望がわあんと押し寄せて、どうしようもないことになっている。
落ちつかなきゃ。そう思って、頭をぎゅっと抱えた。髪がぱさりと頬に触れる。教室の喧騒は、遠い遠い世界のことのよう。深呼吸をする。鍵つきの引き出しに入れた飴が、無性に恋しかった。

その日あたしは、ジュンノとみづきちゃんが一緒にいるところに居あわせた。放課後の、掃除の時間。あたしは廊下にある流しの担当だった。ごわごわと強張ったぞうきんを、ずらりとふちに並べてゆく。どこか不潔なせっけんのにおい、てらてらと無機質な銀色、じとりと湿った暗い空気。早く終わらせたいなぁと思いながら、ひたすらにぞうきんを絞っていった。早く終わらせて帰って、ふとんのなかに丸まって、感情を整理したい。
そんなときだった。
「あ、純野くんも、廊下掃除だったんだぁ」
ぞうきんを手にしたまま、振り向く。二組の後ろがわの扉から、ほうきを手にしたみづきちゃんが出てくるところだった。三日月の目、隙のない微笑み。そして私の教室、三組の廊下を、ジュンノがほうきで掃いていた。何ということだ、あまりにもぼうっとしていて、ジュンノがいることに気がついていなかったらしい。
みづきちゃんは、おっとりとつづける。
「ねえ今日、本屋さん寄っても良い？　好きな本のね、新刊が出たの」
「ああ、こないだ貸してくれたやつ？」
「そうそう。その新刊」
その会話はおそらく、ふたりにとっては何てことない日常だった。

言葉には、生活の雰囲気があった。心を許しあった人どうしの、砕けた親密さがあった。

でも、なぜだろう。あたしの心は、波立たない。

ふたりが放課後の過ごしかたを相談するのを聴きながら、あたしはぞうきんを洗う作業に戻る。不思議だった。覚悟してた、ふたりが仲良くしているところを見たら傷つくだろうと思っていた。なのに今、あたしは何も感じていない。平然と悠然と、どこか他人ごとのような気もちでいる。

さっき、ジュンノの気もちを聞くことができたからだろうか。ジュンノは飴が好きだった、そして気もち良くなっていた。それはあたしにとって、とても大事なことだった。欲しているのは、あたしだけではなかったのだ。

後ろでは、ふたりがいまだたのしそうに喋っている。みづきちゃんは甘ったるく語尾を伸ばして、ジュンノは柔らかく返事をしているのがわかる。それを壊したいとか潰したいとか、思ってもおかしくないはずなのに思わなかった。たとえるならば、子どもの恋愛ごっこをやさしく見守っている気分。

あたしは手を止め、ふと思った。

もしかして。

もしかしてこれは、単なる恋愛ごっこなのではないだろうか。だってふたりは、あまりにも無邪気に話しているから。ねっとりと粘っこい、性の快楽とはあまりにかけ離れている雰囲気だったから。何て言うか、どこまでも健全なのだ。妖しい雰囲気が、いっさいない。学生どうしの恋愛ごっこ、そう思うと、その考えはとても適切なものに思えてきた。

でも、ジュンノは、飴の快楽を知っているはずなのに。性の快楽を知っているはずなのに。そんなこと、する必要ないのに、そう思って、でも思い直す。そういう年ごろなのだろう。つきあうだとかつきあわないだとかで、大騒ぎする年齢だ。とくに男の子なら、対面とか地位だとか、そういった問題もあるだろう。ジュンノのよう

な、いろいろとわかっている男の子がそういったことを気にするなんてすこし意外だったけれど、まあそういった現実的な側面も、もちあわせていたということなのだろう。そう思うと、あたしはますますジュンノがいとしくなった。かわいそうなジュンノ。こんなにもたのしげにみづきちゃんと喋って、ほんとはそんな気なんてないのに。

そうだ、そう考えればすべては納得がいく。ジュンノはだから、「残念だけど、しょうがないよね」なんて分別あるようなことを言ったんだ。性に、罪悪感をおぼえて。そんなことする必要、ぜんぜんないのに。恋愛ごっこは恋愛ごっこで、したってまったくかまわないんだ。ごっこ、だもの。そこに性の、甘い匂いは存在しない。ただただどこまでも透明であっさりとした、友情の延長線上の関係があるだけだ。あたしはそんなの、気にしない。大切なのは、もっともっと身体を貫く深い部分。そこさえ通じあってれば、あたしは何にも気にしない。

そう、そうだ、そういうことだったのだ。

あたしはくるりと振り返る。

「ねえ、ジュンノ」

言葉は思考の流れとして必然として、自然と出てきた。みづきちゃんが、きょとんとあたしを見る。可愛いけれど、間の抜けた顔。ああやっぱりみづきちゃんは子どもなんだ、あたしとジュンノは大人だから、みづきちゃんだけ仲間外れ。いっぽうでジュンノは、小さく首を傾げてじっとあたしを見つめてきた。ああ、きれい。久しぶりに、素直に思うことができた。やっぱりジュンノは、うつくしい。舌をつけたらきっと、とろりと甘く溶けてしまうんだ。

あたしは、ジュンノにだけわかるような、でも決定的な言いかたで言った。

「飴、やっぱり、舐めることにする。ジュンノもそっちのほうが良いでしょう？　明日、もってくるから」

ジュンノは無表情に目をしばたかせて、でもそれは一瞬のことだ

った。うん、と小さく頷いて、ありがとう、とひそやかに微笑んだ。みづきちゃんに見せるのとはあきらかに違う、共犯者の笑み。
ああ、ジュンノ。
あたしは痺れる幸福のなかで思った。
やっぱりきみは、わかってたんだね。
その日あたしは引き出しの鍵を開けて、そのあとベッドのなかで存分に快楽を貪った。吸って転がしてずっとずっと舐めまわして、どこまでも味わい尽くした。今回はいつにも増して、ジュンノの肌がジュンノの甘みが、生々しく感じられた。だってあたしたちは、深いところで通じあっていたわけだ。そう思うと、もうしあわせでしあわせでぐちゃぐちゃとどうにかなってしまいそうだった。
果ててもあたしは、思うことができた。
あたしは、ひとりじゃない。

隣には、ジュンノがいる。あたしの大事な共犯者。教室の喧騒なんて、聞こえなかった。ここには今、あたしたちしかいない。
「飴、舐めてる？」
甘いだ液を飲みこんで、あたしはぞくっとしてしまった。ああこれだ、久々に来た。あたしはうん、と頷いて、ポケットのなかから飴をふたつ取り出す。りんご味と、みかん味と。あたしが舐めてるのとおなじ組みあわせ。
「ふたつも？」
訝しげな顔をするジュンノを、ほんとに舐めてしまいたい。舐めて溶かしてしまいたい、でも溶けないからこそジュンノは魅力的。
「うん。これ、ふたつ一緒に舐めるとおいしいんだよ」
あたしと一緒に貪ろう、あたしの用意した快楽を。ジュンノのための、ジュンノとあたしのためだけの快楽を。
ジュンノの手のひらに、飴を落としてやる。かさりかさりと、しずかな音がする。ジュンノはじいっとそれらを見つめてから、その細くておいしそうな指できゅっと袋を開けた。そして口を小さく開

けて、くっとなかに押し込む。
その瞬間、ジュンノが、眉をひそめたその瞬間を、あたしは見逃さなかった。これはなによりの証拠だった、ジュンノが気もち良いってことの証拠！
あたしは思わず、話しかけてしまう。
「おいしい？」
「……ん、おいしい」
そのおどろきを含んだ声にあたしは満足して、にっこりと微笑む。きっと今あたし、最高に良い笑顔してる。
ジュンノ。
こうしてあたしは、ジュンノと悦びを交わしてゆくんだ。今までも、これからも。それは果てしなく果てしなく、果てしなく素晴らしいこと。気を失いかけるほどに、素晴らしいこと。
ああ、ジュンノ。
あたしたちは、通じあっている。

校舎を出た瞬間、眩しさに目を細める。太陽はどこまでも明るくて、参ってしまう。運動部が頑張っているようすをぐるりと眺めながら、あたしは歩き出そうとした。
そのとき、視界の端にジュンノを見つけた。ひろびろとした校庭のいちばん隅っこ、緑色の桜の木の下に、ジュンノが座り込んでいた。なにかまた本を開いて、かばんを傍らに置いて。
ジュンノは、ひとりだった。そのうえ木の下はしんとした陰になっていて、おまけに誰も、そちらに気を留めているようすはなかった。
衝動が、つきあがってくる。瞬間、あたしは、そちらに向かって歩き出していた。
たぶん、もう、限界だった。しあわせすぎてしあわせすぎて、せつないのだ。すごく、せつない。満たされてるのに満たされない。ざっざっざっ、と砂は音をたてて散ってゆく。運動部のかけ声が、

リズムとなって聞こえてくる。
あたしが目の前に立つと、ジュンノはつと視線をあげた。そして、神崎さん、とひとこと言う。神崎さん。どうしたの。
あたしは何も答えず、隣に腰を下ろした。ジュンノの汗の匂いは、ほのかに甘く芳しかった。ジュンノの気配が、いっぱいに感じられる。そしてまじまじと、ジュンノに見惚れる。その輪郭、その瞳、その鼻、その唇、何よりその、どこまでもつややかな肌！
ああ、あたしの、溶けない飴。いとしくてせつなくて、どうしようもなく幸福な。あたしはもう、限界だよ。こんなにあたしをおかしくさせて、もうどうしてくれるんだ、
もう、無理だった。
あたしは目を細め身を乗り出して、舌をそっと突き出した。溶けない飴は、意外にも淡くしょっぱい味がした。でも良いんだ、これが溶けない飴の味！　破裂して、しまいそうだった。心臓まで興奮して、どくどくと鳴っている。身体の中心が、とろとろと溶けている。液体のように、溶けている。ここでしてしまいたいほどだ。いつまでもいつまでも、気もちの良いことをしていたい。
ふっと、冷たい空気が口に入り込んできた。見ると、ジュンノはあたしから身体を離し、後ずさっていた。あたしをうかがうように見つめ、そして本とかばんを抱えると、ぱっと走り去っていってしまった。
走り去ってゆくそのかたちの良い後ろ姿に向けて、あたしはもう一回、舌を突き出した。そして舐めるように、動かしてみる。それだけで、しょっぱいのにだらしなく甘ったるい、あの味を思い出すことができた。
頬が、緩んだ。自然と。
しあわせ、だったなぁ。もう、どうしようもなく、しあわせだった。間違いなく。
あたしはあの味を、永遠に忘れないだろう。何回も何回も、反芻することだろう。

溶けない飴に、あこがれた。
それはこうして、報われたのだ。確かに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1495t/

溶けない飴に、あこがれて。

2011年5月9日21時10分発行